京都帝國大學新聞　（火曜日）　昭和十年十一月十五日第三種郵便物認可　（大正十四年四月十五日第三種郵便物認可）　第二百三十五号　（一）

京都帝國大學新聞
月三回（六の日の發行）
一部金拾錢（郵税共）
一年間郵税とも金壹圓
廣告料　一行　一回　金壹圓
一行につき次回は金五拾錢
一回に數回掲載するときは二回目より金參拾錢
一人
一雄
印刷兼發行者　京都帝國大學新聞部
京都市左京區吉田
九一二五番
印刷所　京都帝國大學印刷所

更に新しき發展へ けふ出發の首途

文學部卅年の懐古のうちに 意義深き其の祝典

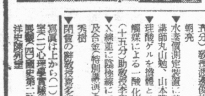
學術研究の殿堂として第一歩を踏み出してからこの方、自由闊達の学風の下に國家有為の人材を輩出し、學界の權威を以て任じつゝ来た京都帝國大學文學部は、愈々本日を以て卅年の輝かしき歴史に終止符を打ち、新たに第二歩を踏み出すことゝなつた。この記念すべき日を卜して、學部では、先づ午前十時から本部構内大ホールに於いて、盛大に記念式を擧行した。式場には、朝から學部の關係者は勿論、學外からも多數の來賓が參集して、場内は立錐の餘地もない程の盛況を呈した。

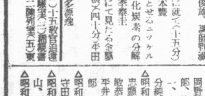
先づ部の首脳として、新たに文學部長に就任した、哲學科教授、文學博士、波多野精一氏が、壇上に立つて、開會の辞を述べ、次いで、文學部の沿革に關する講演を、國史學科教授、文學博士、内藤湖南氏が行つた。内藤博士は、先づ、文學部の前身である、明治十年、東京に設立された、東京大學文學部から、明治三十年、京都帝國大學の創設と共に、文科大學が設置されるまでの經過を述べ、次いで、文科大學の創設から、今日の文學部に至るまでの、變遷の跡を、詳細に説明した。

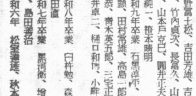
次いで、文學部教授、文學博士、藤岡勝二氏が、文學部の現狀に關する講演を行つた。藤岡博士は、文學部の現狀を、哲學、史學、文學、語學、美學、考古學、社會學、心理學、倫理學、印度哲學、支那哲學、國文學、國語學、英文學、獨逸文學、佛蘭西文學、言語學、東洋史學、西洋史學、國史學、國法學、經濟學、經濟史、財政學、統計學、刑法、民法、商法、國際法、國際私法、政治學、行政法、憲法、法理學、法制史、法學通論、の各講座に分ち、各講座の沿革、現狀、及び將來の計畫に關して、詳細に説明した。

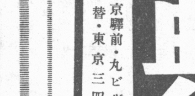
次いで、文學部教授、文學博士、内藤虎次郎氏が、文學部の圖書に關する講演を行つた。内藤博士は、文學部圖書の、現狀、及び將來の計畫に關して、詳細に説明した。

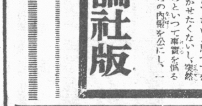
次いで、文學部教授、文學博士、藤岡勝二氏が、文學部の現狀に關する講演を行つた。藤岡博士は、文學部の現狀を、哲學、史學、文學、語學、美學、考古學、社會學、心理學、倫理學、印度哲學、支那哲學、國文學、國語學、英文學、獨逸文學、佛蘭西文學、言語學、東洋史學、西洋史學、國史學、國法學、經濟學、經濟史、財政學、統計學、刑法、民法、商法、國際法、國際私法、政治學、行政法、憲法、法理學、法制史、法學通論、の各講座に分ち、各講座の沿革、現狀、及び將來の計畫に關して、詳細に説明した。

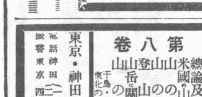


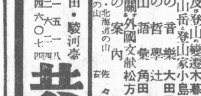


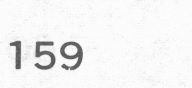








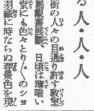


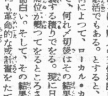


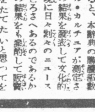
參列者千を超に 歡喜堂に滿つ

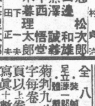
式は追憶と感激の坩堝の中に

新古二つの
餘興に
恍惚として
時をわすれる









開放された學の秘密箱に あつまる人・人・人

勳績七氏を 表彰す

記念品を贈呈

卅周年史 を參列者に

いのち短かく 業績は永へに

かすゝ〜の遺澤とともに 追遠至に偲ぶ温容

手を取り合つて 久濶を舒ぶ

京大クラブの懇親會

こゝは別天地

一年前からきまつてゐる 教室もある工學部

化學研究所の 第七回秋講演會

卅日午後樂友會館で

大學の擴延・大學の恐慌

世界文藝大辭典

東京驛前・丸ビル
振替・東京三四

【〆切迫る】本辭典は本社創立五十周年を記念しての刊行に係りその出版記念のため各卅七圓の定價も目下特價五圓を以て頒布中である。かるか不朽の名辭典は、しかく容易に出來るものではなく絕版にでもならば恐らく二倍三倍の騰貴では濟むまい。諸氏よ、機會の瓸は逃げてをる。うしろからではつかまらない。求めるるなら今である。

全七卷四六倍判・定價各冊七圓 大特價各卅五圓（一冊郵税四錢）

第一卷發賣中

竟に海外を迄震撼せる本辭典の聲價

目下第二卷第三次配本中

文化程度の一番低いのはどの縣か？

中央公論社版

岳山講座

第一卷…再版出來
積雪期登山について　高橋健治
婦人と冬期登山　黒田正夫
山の文學　黒田初子
山の案内　深田久彌
町田立嶺
角田松次郎
邪馬日光・尾瀬の山
上越境の山
東北山塊の山
冠松次郎

第二卷…十二月十日
山の氣象　三浦襄五郎
スキー術　高橋健次
冬期登山食物　初子
山岳に關する本邦文献　坂戸忠雄
山の案内（北アルプス）　辻荘一
松次郎

第三卷…十二月廿日
地質と岩石　今村明恒
氷河と氷河地形　小川琢治
登山と民俗　瀬戸口藤吉
山の高嶺　木暮理太郎
山の名勝寫眞　高頭仁兵衛
山の動植物と人生　麻生武
山の極地探檢　加納一郎
山の案内（九州の山）　川崎一雄

第四卷…昭和二年一月
山の案内（朝鮮の山）　今西錦司
山の案内（樺太の山）　大島亮吉
山の案内（台湾の山）　森丑之助
山の案内（関東の山）　木暮理太郎
山の案内（中部山岳）　小島烏水
山の案内（南アルプス）　木島正一
山の案内（北アルプス）　辻村太郎
山の案内（富士山）　岡田喜秋
山の案内（丹沢山塊）　岡田喜秋
山の案内（秩父山塊）　岡田喜秋
山の案内（奥秩父）　岡田喜秋
山の案内（上信越の山）　岡田喜秋
山の案内（東北の山）　岡田喜秋
山の案内（北海道の山）　岡田喜秋
山の案内（樺太の山）　岡田喜秋
山の案内（台湾の山）　岡田喜秋
山の案内（朝鮮の山）　岡田喜秋

第五卷…昭和二年二月
山の小説　小島烏水
山の文學　深田久彌
山の案内（近畿の山）　深田久彌
山の案内（中国の山）　深田久彌
山の案内（四国の山）　深田久彌
山の案内（九州の山）　深田久彌

第六卷…昭和二年三月
山と天文常識　一戸直蔵
夏期登山の食物　尾崎喜八
山の案内　尾崎喜八

第七卷…昭和二年四月
山の植物　松村任三
山の見方と種類　中村清太郎
山の鳥獣　黒田長禮
山の昆虫　松村松年
山の地質と岩石　横山又次郎
山の氷河と氷河地形　小川琢治
山の気象　藤原咲平
山の雪　吉村正
山の登山術　吉村正
山の哲學　三宅雄二郎
山の語學　角田柳作
山の文献　松方三郎

第八卷…昭和二年五月
山の名著　小島烏水
山岳圖繪　吉村正
山岳寫眞　吉村正
山の音樂　吉村正
山の美術　吉村正
山の文學　吉村正
山の案内　吉村正

特色
!!立確のムズニピルア本日朗明!!よ見
!!悦愉く繙を書本に邊爐の山冬!!へ想

東京・神田・駿河臺
振替東京四二六〇一四
電話神田二五一八番
共立社

現代支那を診觸す

(A) 對日外交と感情

神尾茂

感情を無視して政治はない、極端にいへば政治は感情である、とさへいへる。殊に國際政治上に働く感情の力は、一國の外交を論ずるに際して無視することのできない最大原動力ともいへるだらう。

ところがこれとあべこべの狀態に置かれてゐるのが、今日の支那の對日外交ではあるまいかと思ふ。卑見によれば、支那がその感情の赴くまゝに、自由奔放な行動を、その國民のとるにまかした時代はすでに過ぎた。冷刻なる現實の前に跪まづき、あらゆる感情をころして、嚴然たる理性の命令に從つて、對日外交を進めやうとしてゐるのが現在の支那の姿ではあるまいか。

その點からいへば、日本側にこそ感情による外交指導の跡を今だにとゞめてゐるといへないだらうか。即ち、蔣介石に對する反感の如きが、今もつて日本の對支政策の重要なエレメントになつてゐる、などはその一端である。

支那政府は今年二月對日轉向を宣言し、約法による「營業の自由」を高調することによつて、日貨排斥の不法なることを國民に諭し、六月には更に「敦睦邦交令」を發して善隣親睦の意を明白にしたのであつた。しかしこれは、政治家的判斷によつて一國の利害から打算した結果であるのはいふまでもない。からしたからとて日本に對する感情の友好化したことを意味するものではない……

組合統制に於ける問題

蜷川虎三

「增稅及整稅論」を讀む

神戸教授者 島恭彥

政治的概念と法律的概念

黑田覺

内外評論

藤田進一郎

椰子蟹とり(一)

林一正

聯盟最初の制裁發動

崇嚴そのものではあるはいゝとしてその歩みが「でんでん虫」よりも何遅々たるに至つてはエチオピア君の當惑も亦宜なるかな！

×ヴィンニング・スタンダード紙から×

廣告

永田廣志著 唯物史觀講話 白揚社

アインシュタイン著 我が世界觀

英語研究 研究社

國家試驗 育成洞

理想 十二月號 現代宗教論 理想社

昨冬の體驗を基礎に ゆきの興安嶺へ

先發隊は來月十五日出發 山岳部今冬の壯擧

昨冬滿鮮國境に白皚々の雪を載いて聳立する千古の秘峰白頭山を征服し、この未曾有の快擧に見事成功して幾多貴重な報告を齎らした本學旅行部では、今冬更に前人未踏の雪の大興安嶺縱走を敢行することとなり、目下諸般の準備を進めてゐるが、その計畫内容は次の如くである

△隊長工學部坂龍男△醫學部水川末禮雄△法學部杉山佐一△理學部兒島勘次、郡場正之、吉井良三△工學部西堀博△經濟學部岩橋清次郎、加藤泰安、竹内佐郎△農學部四手井綱英の諸君、その豫定プランは次の如くである

△本年十二月十五日 先發隊京都出發、朝鮮經由、新京を經、博克圖、ハイラルにて軍部と打合せ

△十二月廿三日 本隊京都出發

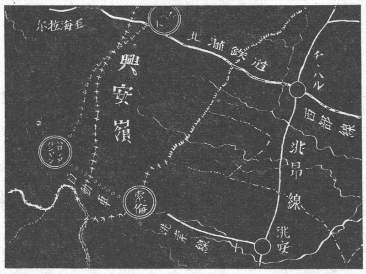
△十二月廿七日（ブトにて先發隊と合隊

△廿九日 （ブト出發 大興安嶺縱走にかゝり、途中千七百廿八米の附近最高頂に登頂、ハロンアルシヤンに向ふ（行程二百五十キロ）

△昭和十二年一月十七日 ハロンアルシヤンに到着△同十九日出發、索倫（ソロン）へ△同廿日ソロン出發、新京を經て歸路につく△一月廿六日京都歸着

これについて學友會大野事務幹事は次の如く語つた

大興安嶺を縱走した人は軍部でも京都師團の長参謀、それから……



……興安嶺附近略圖……◇

……殺された中村大尉二人位しかない其時は一人當り二千圓の費用で七十日間を要してゐる、話によれば今は積雪二丈餘にも及ぶべく、狼や熊が我物顔に出沒するさらで全く人跡未到の氷原だるが疑問だ、日程通り行けばいゝと考へてゐるが、去年の白頭山の例もあるので今年も朝日新聞社の後援をお願したいと考へてゐる

遺傳學談話會 今夜樂友會館で

日本遺傳學會京都談話會では、今夜六時から樂友會館で第十五回例會を開催、左記兩氏の講演あり、會費三十錢、來聽を歡迎する

▼日本産竹類の核學的研究（内川勇）▼滯歐見聞談（蓑内收）

學生生徒總數 五千八百人

本年九月末日現在調

學生課の調査にかゝる本年九月末日現在本學學生、生徒の總數をきくと大學院學生七百六十八人、各學部學生四千八百三十七人、同生徒百九十二人、合計五千七百九十七人で、その内譯は左の通り

	大學院	學生	生徒
法	八三	一六七六	二二
醫	二五四	五一〇	五八
工	一一五	五七五	二二
文	三〇一	六一一	四六
理	五二	二八八	一三
經	五〇	八二四	一三
農	一三	三五三	二五

四七年六ケ月の學生もゐる

なほ各學部學生の年齡しらべによると、最年長者は理學部の四十七年六ケ月、最年少者は理、農兩學部に十九年三ケ月の人がゐる、學部別にすれば左の通り

	最高	最低
法	四二・六	一九・五
醫	三三・二	一九・六
工	三三・四	一九・七
文	四三・五	一九・四
理	四七・六	一九・三
經	三五・一	一九・六
農	四三・三	一九・三

某教授寄託の千圓を廿三人に

學資補給きまる

……學資になやむ學生への同情から某教授が寄託した一千圓は、その後學生課黒田主事補のもとで、申告をとりまとめたが、總數三十九名の多きに達し、種々詮衡の上廿三君に給與することに決定した、内譯は

法八、文四、經四、醫四、農二、工一、理なし

で、廿三君中約半數は父を亡つてをり、その中でも當人が戸主のものが可成多い、彼等の多くは高等學校時代すでに困窮の生活におち入り、家庭教師や或ひは家庭よりの僅かな送金によつて學びの道にいそしんで來たのであるが、申告書中には「近頃は家庭教師の口もなく全く困窮してゐる」といふのもあり、この千圓の分配でホツと一息ついて、さらに新生面の開拓の餘地を得らるゝことを思へば嬉しい限りである

古典趣味豐かな 遠足部のプラン

旅行部では早くより同部の部長たる中村直勝文學部助教授と同行で大和地方にハイキングを行ひ、同地に豐富な古寺院その他の古代文化の跡を探り、かつ斯界の權威たる同助教授に臨地講演を願つて心行くまで古典趣味を滿喫すべきプランを計畫中であつたが、此度愈々二つのプランを發表した

▼すなはち其の一つは來月一日（日）午前八時半、京都驛集合の上、大和小泉驛まで九時四分發の湊町行列車を利用、それより法起寺、法輪寺、中宮寺、法隆寺を歷訪して飛鳥文化の精髓に接し、當代の盛觀を遠く追想せんとするもので、會費は一圓半

▼他の一つは八日（日）同じく午前八時半、京都驛集合の上、奈良電車を利用、岡寺—橘寺—川原寺—石舞臺—酒船—飛鳥大佛—飛鳥京—藤原京—岡寺の順序で大和平野南半の古代遺跡を隈なく歷遊するもので會費は二圓半、兩者共に辨當は各自持參とし汽車割引二枚入要

兩者合すれば大和地方古代文化の過半を涉獵することになり、且つ中村助教授の臨地講演の實現を得たとて同部では一般學生及び先輩諸君の參加を切に希望してゐる

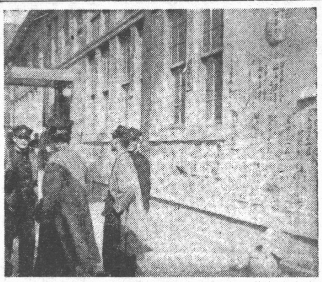
王座を死守すべく 同志社こ一快戰

◇……ラグビー戰豫測

關西ラグビー界のクライマツクス本學對同大の一戰は餘す所僅か一週間の後に迫り、此の一戰に關西の王座を死守すべき重責を双肩に荷ふ本學ラグビー部は一意猛練習に餘念が無いが、昨年のメンバーよりF・Wで吉川、久永、バツクで名コンビ磯田、伊地知及びF・Bの天野（兄）の五驍將を送り出した後を受けて今春高校より多數の人材を得たこのチームの陣容を見れば……

フロント・ローには左から昨年の梅原、山口に新人の岩男（成城）が入り、サード・ローでは今年になつてから一段と進歩を示してゐる阿部、主將の渡邊、伊藤の三君がセカンド・ローの不整備を補つて餘りある威力を示してF・Wの全責任を負つて立つてをり、次にハーフには今春病を得て一抹の杞憂を抱かせた齋藤君が元氣を恢復してファンを喜ばせスタンド・オフには甲南よりの新人平澤君が素晴らしい活躍振りを見せてゐる、T・B線では昨年のメンバーは小川君一人、多少の不安を抱かせるが左から天野（弟）小布施の兩君に平澤君と共に今春甲南より入つた由良君が加はつて異彩を放つてをり、F・Bには宮尾君（高知）が選ばれ……

（以下略）



明年度の學友會代議員きまる

棄權率七十％に達すれど 前年に比し好成績

昭和十一年度學友會代議員選擧は去る廿一、二の兩日、各學部事務室で行はれ、廿二日午後六時から學友會事務室で開票委員立會の下に、開票されたが、本年度總有權者數二千八百七十八名に對して投票者八百七十八名で昨年の棄權七割二分に較べて、棄權七割の例年にない好成績を示したが、投票數は昨年より卅六票少いのだ……このことは有權者數の全般的に皆……を示してゐる、……身の中立代議員が目だつてゐる、その結果を各學部別に内譯すれば次の如くである

法

有權者 八九…　投票者 二七…

（定員十一名に對し立候補十…）

當選廿九票 志賀正治　廿四票 牛田久重　廿三票 山手滿男　廿二票 水口昌司　廿一票 大野義…　十九票 若林隆…　十九票 岡義正

醫

有權者 三七八名　投票者 一六一名

（定員五名に對し立候補八名）

當選卅九票 吉田壽三郎（共濟）　卅二票 荒木元秋（音樂）　十七票 小島福三郎（新潟）　十七票 小野勝喜（端艇）　十六票 大森誠一（スキー）　十五票 斎欽一（馬術）　次點十五票 占部春次郎

工

十一票 津田至（スケート）　八票 芳岡周夫（弓術）　七票 多田英徳（ラグビー）　六票 西田猶之助（競技）　五票 樋谷義博（馬術）　次點二票 島信正

文

（定員六名に對し立候補七名）　有權者 三六五名　投票者 五九名

十八票 河北倫明（美術）　……六票 上田稔

理

有權者 一五一名　投票者 三十名

（定員五名に對し立候補六名）

當選八票 渡邊英造（スキー）　六票 井街仁（陸上）　五票 郡馬正之（旅行）　四票 不尾浩（ラグビー）　四票 菊地秀夫（競技）　次點三票 岡田三郎

經

有權者 五〇七名　投票者 一四二名

（定員八名に對し立候補九名）

當選卅一票 清水達夫（劍道）　廿八票 宮川克己（射擊）　十八票 岩城義郎（三高）

農

有權者 一八…　投票者 九…

十五票 岡田脩　十四票 安田義彦　十三票 村上牧男　十票 五井賢之輔　九票 三原耀…　次點五票 柴田芳一

（定員五名に對し立候補八名）

當選卅二票 白波瀬四郎　十四票 中島武　十二票 佐藤秀司　十一票 田中淳雄　八票 山田豐一　次點六票 新見修

（寫眞は選擧當日の光景）

雄圖むなしく 蹴球部敗退す

關學との決勝戰に

關西學生蹴球リーグ戰第一部の本學對神戸高商戰は十七日午後一時から南甲子園運動場で三崎（主）安藤、野田（線）三審判の下に擧行、試合は先づ濱側、風下に陣した本學の先蹴に開始されたが、本學の……

本學 8（4—1、4—1）2 神戸

かくて關大と引分け、大阪神戸高商に勝ち定點五點の……

連勝のホッケー部 功を一簣に欠く

覇權は東京商大に

……愈々二十四日午後二時五分、外園、大寺兩審判のもとに關東代表、東京商大と全日本覇權の爭奪戰を開……

優勝戰

本學 0（0—0、0—4）4 東京商大

けふ決勝戰

籠球秋季リーグ戰

關西學生籠球聯盟主催の第九回秋季リーグ戰第一部に出場、最初チームの中心、平塚、山木、松井三選手の不出場に禍ひされて對甲南戰に不覺の一敗を喫したが、間もなく三選手、その雄姿をコートに現してより後は逆戰連勝、關大、神戸高商、大阪商大に二勝して、意氣軒昂、一路制覇に邁進の本學籠球部は愈々八勝一敗の成績を以て、八勝零敗の強敵關西學院と爭覇の鋒を交へることとなり、二十三日、第一次試合を、二十四日、第二次試合を夫々甲子園室内ホールにて擧行、第一次試合には關學の追擊を輕く蹴して凱歌を擧げたが、第二次試合には前日の疲れに好調を失つて遂に無念の惜敗、愈々本日午後五時半より甲子園室内コートに於て、最後の決勝試合を行ふこととなつた、第一次、第二次試合の成績左の通り

第一次試合

本學 37（15—22、22—7）26 關西學院

第二次試合

本學 35（21—18、14—21）39 關西學院

十二月一日の對同大戰を前に

ラグビー部連戰す

ニユージランド學生軍、明春來朝を前に我國ラグビー界は今シーズン最初より東西ともに低然、極度の緊張振りを示しつゝあり、殊に昨今はシーズンも本舞臺に入つて數多の白熱戰にファンの血を彌が上にも湧かせてゐるが、本學ラグビー部は十二月一日の同大戰を前にして十六、廿四の兩日、共に花園ラグビー場にて、左の四試合を擧行（内二試合はBクラス）、十六日午後二時より小幡（七）吉富、小林（線）三氏の審判で南側に陣した本學の先蹴に開始された對滿鐵戰に、前半三トライ三ゴール、後半一トライ四ゴールを得て完勝したのをトツプに左の如き戰績を殘した

十六日	本學 47—3 滿鐵	本學B 33—0 大阪商大	
廿三日	本學 42—11 學士ラガー	本學B 28—46 同大OB	

學生講演會は無期延期

學内學生講演大會は、出演希望者意外に少く委員會議の結果、つひに無期延期と決定した、久し振りで若き學徒の熱辯に接しうべく期待されたこの大會が、開催不能に立ちいたつたのは淋しいことである

京大短歌會

十二月例會

十二月三日後六時樂友會館、會費廿錢、詠草一首を……までに大阪府下茨木町一五三、……三郎君あて送附のこと

廣告

一九三六年度 海外新聞雜誌豫約期

國際的な飛耳長目は、今日に生きるための必須要件となつた。しかも海外新聞雜誌の購讀こそ之を可能ならしむ唯一の方法！

丸善株式會社京都支店

各種ストーブ据附請負　京大御用達　八木商店

京都帝國大學御用達　表具師　九年堂

小山齒科醫院　小山正光

祝文學部創立三十周年

土木建築請負業　株式會社大昭組京都出張所　京都市河原町荒神口上ル　電話上（3）四一六二番

歐米漫遊と海外留學の洋服は 京大共濟部指定 ロンドンスタイルの長屋　寺町丸太町南

白井直眼鏡店　京都帝大病院前　京都帝國大學共濟部御指定所　元賣發光レンズ

聯想（上）

兵頭本　善　矩

研吉が奈良へ歸つて、猿澤池畔に落ちつけさうな小家を見つけ、ホッとした氣持ではじめて高畑の大津先生を訪問した晩、丁度東京歌舞伎座の座附の笛吹き隈田力藏氏が來合せてゐた。先生は肩や腕の手術後の回復が、さすが初老期のあまりはか〴〵しくなく、首のまはりに濕布が殘り、平素人一倍底光りのする眼にも深い疲れが見えた。研吉は隈田氏と逢ふのは初めてゞ、最初は一寸誰だらうと思つたが、やがて或る文學博士の新作の脚本の話が出、足腰不自由な主役の老優が、緞帳が上ると、さすが無難にやつてのけたが、動きのない芝居だけに、稽古の間後で氣を揉んだことは並々でなかつたと云つたりしたので漸々聞いてゐる笛吹きとはこの人か、と直ぐ見當がついた。

五十八九でもあらうか、廣い食堂の壁際の椅子の一つにスリッパをぬいで坐りこみ、新聞に眼を落しながら、大型の卓子をかこんで賑やかに燥ぎつゝ晩餐最中の幼い令息令孃達が、皆純粹の奈良縣になり切つてゐるのを小耳に挾んでは、時々魂消た樣な面をあげた。

周圍が騒々しいところへ、先生が病後でもあり、それに元來が決して饒舌ではないらしい隈田氏は初めのうちは殆んど默りこんでゐたが、それでも一人おくれて、年寄の江戸つ兒には苦手らしいハムと蔬菜か何かで出された食事を濟ませ、再び椅子に戻つて端坐して爪楊枝を使ひながらポツリ〳〵と話す言葉に、ある水準まで到達した藝人のもつ枯々と磨かれた味感があつた。

どうしても芝居、それも歌舞伎のことが話題の中心になつた。先生も奈良へ隠棲して近年は忘れたやうな顔をしてゐるものゝ、青年期は御多分に漏れずせつせと見物して廻つた方で、若暦で劇界の知識に乏しい研吉さへ、ツイ尻馬に乘つて口をはさみたくなるやうなその場の空氣だつた。

「赤根屋半七は、私の町の人です。ひと頃、極樂寺と云ふ寺で石塔が見つかつたと騒いだら、後になつてそれがよその心中者のだつたとわかると、今度は三勝半六率議會と云ふやうなものが出來て、毎晩町の隱居どもが緋房のついた鉦を叩いて廻つて記念碑を建てる寄附金をあつめたりしました。大和五條の酒屋だつた事はたしかださうです」

「さうかね。さう云へば忠兵衛がさうだし、大和から出た色男が中々居るね」

前代の菊五郎、眼藏、芝鶴、それに瀬川菊之丞、さう云ふ似顏繪を貼りつけた枕屏風をもつてきて隈田氏にさし示しながら、先生は笑つた。

「ほう、御宅にも、斯う云ふ物が……さうですか。私はまたあの五條を京都だとばかり思ひこんでゐた」

隈田氏は、話がすつかり自分の畑に移つたものだから、我が意を得たりと云ふ風に愉快さうに活氣づいた。

「奈良縣宇智郡誌を讀むと、非常に半七の肩をもつて辯護してゐる條があつて面白いんです」

半七は親孝行で、商賣熱心で、吉野川の清流を利用して晒染を考案したり、竹林の豐富な地方だから番傘の丈夫なのをこさへて五條傘の評判を高めたり、貧乏人は救ふ家傳藥は頒布つ、洪水で橋や堤が切れるとイの一番に寄附はする町内の褒められ者だつた。たゞ晩年に至つて躓いた。が、人間の長い一生には誰しも過失はありがちである。このいさゝかの瑕瑾のために、彼の前半生幾多の功績を帳消しにするのは過酷な話だ。彼を放縱の血に沸る蕩兒として描いた當時浪華の戯作者達の罪は深い。さう言ふ意味の事が書いてあつた。

話しながら研吉は、心の中に湧き出し、盛りあがつてくるものを感じた。今度奈良へ歸つたのをシホに、足を運んで材料を蒐め「艶容女舞衣」の幻想の霞の中に呼吸を止められてゐる幾つかの個性に血を通はせてみよう、と思つた。

第一、事件の起きた場所が郷里五條と、研吉には馴染深い大阪の街。彼が子供のころ、隣家は半七と同等の酒屋だつた。で、その店構へや藏の中の模樣は詳しく知つてゐる。千枚の短册を散らしたやうな晒干す初夏の磧、裸男の撒く打水は中空に虹と燦めき彼方此方に入亂れる。對岸千數町に亘る廣大な畠宗敷、軒中に新綠する濃樹夜、川千鳥、薄霞む山上ケ岳、大臺ケ原の嶺つゞき……

時代物の書出しには斯う云ふ叙景を使はうなぞと、大津先生の邸からの歸りみちにも、夜ふけの公園の若葉の匂ひを嗅ぎながら、彼はひとり考へつゞけて亢奮した。

五十二段下の横手を入る瀟川沿ひの小ぢんまりとした新居の二階で開け放つた障子に背をもたせてゐる時も、彼の頭におのづと泛ぶのは半七の事だつた。眼の下の芝原には朱色の袋角をもつ鹿や鶏が遊んでゐた。向ふの方には宿屋の裏座敷が見え、屋根の上には興福寺の塔の五重目と四重目が浮出てゐる。隠居の風鐸も黒々と小さく分明る位の距離で、群雀の聲も耳にとどき、霞み渡る空を鷹やかな雲が行く。

研吉は凝つとしてゐられない氣持で、あたふたと門の格子戸に南京錠をおろすと午後から大阪の圖書館へ出かけたり、鍋屋町に住む停年期に達して近頃新聞社を退いた老記者の家を訪ねたりした。

「僕の見た中では、やつぱり西澤一鳳の書き殘した物なんか割合信用出來る方やと思ふな。五條の町に傳つてる文献というてもせいぜいあの程度やろ、大概の事はこの本で解る」

「〃讃佛乘〃はこの間、大阪へ讀みに行つてきました。半七が郡内の綿の郷人れに革足袋を穿き二尺一寸の糸柄の脇差をさして手に珠數をかけて死んでゐたし、三勝は日野絣竹小紋の……」

「さう〳〵、そんな事が出てゐた。あれは僕も興味をもつて讀んだ。「死裝束なんて云ふ物からも、それに包まれる一人の人間が滲んできますね」

「まあ、探偵が捜査の端緒をそこから見つけるやうに、君方も、そんな物から想像の尾鰭をつけるほかないな。何せ二百年前の雲掴む樣な話やからな」

目星しい古文書でも漁つてゐないかと尋ねてみたがその人の返答は至極簡單で、研吉は輕い失望を感じた。

「僕に云はせれば、要するに半七が使ひ過ぎた、たゞそれだけや。昔も今も結局それだけや」

老記者の見方は、明快と云へば明快、粗笨と云へば粗笨だが、又一ト味ある言葉とも思へた。

研吉は生活環境が變つた當座のすが〳〵しい亢揚を感じながら、友達の妹に手傳つて貰つて家裏の井戸端で障子を洗つたり、梯子段の下が納戸や物入れになつてゐる古風な構造の家の中をあちこちと拭き掃除しながら、數通の書置と代官所の檢死報告が唯一の手がかりである二百餘年前の心中者をどんな風に取扱はうかと心を碎いた。彼は再三郷里の町へも歸つてみたが、老記者の豫想どほり、芳しい資料は得られなかつた。二度目だつたか、衞六人衆の一人、Sと云ふ家に傳はる記録がかなり有望で、その家にも幾變遷かあつて、當主は或る活版所に勤めてゐると聞いてみると、半七の遺書が二通保存してゐるのは事實だが現在では下市の親戚に保管をゆだね手許にはないと云ふ事で彼は今更ながら考證と云ふ仕事には多大の忍耐と勞苦を要するものであることを知つた。（未完）

洛北の女三題（二）　野長瀨晚花

文學と文學者（上）

古　谷　綱　武

思想といふものを、人間の生存欲望の所産と考へる限り、思想の現實性は、その發展性といふ性格のなかに求められる。しかも、それを發展させるものは、思想自身の行爲によつてであるよりも、むしろ、人間によつてである。だから、現實には、存在するものは、思想ではなく、思想者である。思想は、それ自身の流動性としては機能をもたぬ。機能をもつのは、思想者である。その限りにおいて思想は思想者の、單なる結果に過ぎないのだから、私は、いま思考といふ言葉を用ひた方が、一層適當かも知れぬ。

文學者は、同時に一思想者である限り、たえず、思考を強ひられてゐる。つまり、思考が、生活行爲の反射として、即ち思想者の本能として、あらゆる狀態の精神現象を、常に支配してゐる。しかしそれは極めて斷片的にしか意識されないし、思想者の性格なのだ。だから、思考が充分に生活的である場合には、それは思考といふ意識をともなはない。意識された思考といふものは、それが意識的なだけ、もはや、抽象的でしかない。

しかし、思考が思考自身の發展を志してゐるのは、そのやうな意識された抽象的狀態においてである。思考が思考自身の發展を志して思考される時には、發展とは、もはや、思考の結果ではなく、思考の目的なのだ。思考も、その出發當初においては、發展を目的とした上りは、現狀の必要性といふ限界のなかにあつたに相違ない。必要に感じて空腹を滿せばすむ恬淡な食慾だつた。しかし、ひと度思考が意識されたことによつて、つまり思考の歴史が、思考の存在に作用しだしたことによつて、人間が思考を支配するよりも、思考が人間を支配することによつて、思考は思考自身の發展を目的とした。勿論、そのことを演ぜねばならないのは、思想ではなく、思想者である、つまり思考することが生きることなのだ。生きる限り、それは滿腹を知らない、發展は發展を目的としてゐるのである。

發展は存在の必要性ではない、存在自身である、そして存在が願ふものは、常に存在の確實性である。願はれてゐるものが、存在の確實性である限り、發展は、思考の一層の抽象的變貌を祈願してゐるよりも、思考は、その結果に過ぎない思想の普遍化を祈願してゐるといへる、普遍化されることによつて、存在は確實性を得るし、思考は、思想によつて規定されるのである。思考の發展とは、文學者の場合、思考の表現欲望とは、常に自らの思想の、客觀的には普遍化、主觀的には俗化を意味してゐる。發展とは俗化であるといふ言葉が極端過ぎるとすれば、發展は常に俗化を絶對に必要な過程とするものである。表現とは、文學者の一思考の通俗化である、ただ文學者自身が、それを正當な主張とか必要な啓蒙とか、或は自らの純一化だと考へることは勝手だ。勝手なばかりではなく、根據が考へられないこともない。又、誠實な表現に對しては、一般がそれを承認するであらう。そして存在には確實性が與へられる。ただ私のいひたいのは、かかる思考の通俗化によつて、決定的な束縛を受ける者は、むしろ思考者自身だけだといふことをいひたいのだ。更にその通俗化された思想に、最初に背くのも、その思考者自身の誠實以外にはない。束縛されるのは、それによつて、自己の意義を見出してゐることであり、背くとは足場にすることだ。

文學者は、常に表現をくりかへしてゐることによつて、常に俗化をくりかへしてゐるのである。つまり、文學は次第に俗化、普及、一般化されると同時に、次第に特殊化、抽象化されるものである。そのことは、個人の狀態についても、社會の狀態についてもいふことが出來るのだ。

私は今それを、個人的な狀態についてのみ語りすぎたが、文學が社會一般的な存在となればなるほど、反面には、一般から極端に無關心な特殊社會にもなりつつあるわけだ。——私はなにも大衆文學が益々一般的な文學になりつつある反面に純粹文學が一層特殊な文學になりつつあるといつてゐるのではないのである——一般人は、文學といふものに對して、もはや與へられたものとして以外の關心をもたない、文學を求め、或ひは求めずにはゐられないといふ文學者の狀態は、文學者といふ特殊人以外の人間には、當然に顧みられない。しかも、それは外の仕事の如くに、社會人としての、或ひは經濟人としての生活目的を、根據としてなされた仕事ではない。更に、文學者であることは、何等の社會奉仕をも動機としてゐないばかりではなく、社會から強要された仕事では何更ないのだ。性格といつては漠としてゐるが、とにかく自己の慾望だけを基礎としてゐる。——そのことに、さまざまな意味が考へられるにせよ——社會的には、如何なる意味からも、最大の抽象人に過ぎない。勿論、文學者は、なにものでもないことによつて、なにものでもあるかも知れぬ。そのことは、理想的には、つまり、非現實的には、完全な純粹存在でもあらう。しかし、社會人としての、かかる無傾向性は、完全な存在を意味するのではなくむしろ、無存在を立證し、非存在であることを、物語つてゐるのだ。社會は、かゝる抽象人に對して、無關心であるばかりではなく、社會的責任を感じない。それは當然なことだ。そして、文學者は、みづからの社會的抽象性のなかに、みづからの人間的存在の根據をもたねばならぬ。しかも文學者が文學者を生活することは、文學者にとつては、文學が與へられたものではなく、求めてゐるものだからだ、つまり文學者の根據が文學なのではなく、客觀的には、文學者は文學の原因に過ぎないのである

岡田正三著「孟子講義」

光　田　作　治

◇孔孟の思想が、嚴めしい道德律として、我等精神界を支配した結果主として、その倫理的の方面のみが注目せられて、是等の思想の中に含まれる、就中、孟子の社會思想に就いては、從來餘り權威ある論議がなされなかつたかのやうである。その結果、孔孟の思想は一見固陋な道德律の如き感をすら與へて、現代人をして、一種の親しみ難ささへ覺えしむるに至つたのであつた

◇本書の第一の功績は、所謂聖人孟子をして、人間の境に引戻して現代人と極めて親しみ深くした點にある。即ち、著者は、孟子の思想と時代の關係の下に照明し、時代の特性を明かにして、如何なる環境の下において、孟子の思想が生成したかを闡明した。孟子は孔子の王道思想を奉じて諸侯の招聘に應じる。そこに展開せられる相容れぬものの對話を通じて、我等は諸政の根本改革を企圖する烈々たる時代の兒孟軻を發見する。自らの主張の容れられないことを知つて諸侯の許を去つて獨自の道に生きる孟子の歩みは、現代に生きて、時代の惱みの中にゐる我等にまた、親しみ深く道を傳へて吳れるのである。

◇我等は過去において、賢人孟子の鋭い道德批判を訓へられた。此の著出でて、今、我等は人間孟軻によつて、社會思想としての王道思想を傳へられる、斯くして人生を眞摯に行ぜむとするものにとつて、時代の隔りを取り除いた親しさを以て、此の書から、孟軻は恒に我等に呼びかけるのである

◇著者は說いて、我々が現代の社會に正しく生きる爲には——その反省の材料として、異る社會情勢の下に正しく生きた人々の言葉つまり古典を研究しなければならないといふ。この意圖は、その著書の構成の上にも、極めて周到に用ひられた。序說を伴つた本文の現代語譯が、獨特の音讀によるしかも極めて平明であることは、前著「論語講義」に增す。その後に設けてある批評の一項こそ、此の講義を特徴づけるものであつて著者の視野は、その專攻の範圍に止まらないで、古賢の思想を說くに、現代眼前に動搖する社會事象と結び、その聯關の上に鋭い批判の辭を放つ。斯くしつつ、或は所謂王道思想の道德が、被治者と對立する治者に對しての指針としてなされたものであることを明かにし、或は孟子の道德規律が、恒に社會の構成員としての個人に對するものであることを論じる。プラトン專攻家としての著者の努力は專門家には古典解釋に對する鋭い示唆を盛りながら、一方孟子の直截な言葉と對照して、現時の言論不自由を慨いて、一般社會人に反省を促す。その含蓄において、正しく講義の域を脱したものとさへ言ひ得よう。

◇難解な孟子を大衆文學を讀む程の易しさに砕いて、食後の僅かな暇にさへ讀み得られるまでに努力せられた著者の勞苦の成果に對して心からの禮讃を送りたいと思ふのである。（第一書房・一・五〇）

現代日本の文學

菊池寬氏講演

現代文學を論ずる以前にまづ日本文學論を述べる、日本文學中論ずべきものが三つある、萬葉集、芭蕉の俳句西鶴の小說、これである。萬葉集こそは今日殘存する正倉院御物にも想像される如きかの絢爛たる奈良朝文化の精神的方面において出現した傑作である

次には芭蕉の俳句、これらは日本文學の最高潮と言つていゝ、この深く自然に入つたものは外國には殆んどない、第三の西鶴の小說、これは時代的に言へば西洋小說の濫觴時代に既に彼はその著述にかの巧みな描寫をなしてゐたのである、そして西鶴は人生の深奧を摑んでゐた。これが小說家として大きい所以でもある（近松なぞと比較する時、近松はいざといふ時は常に時代の道德觀に左右された）この意味では近代自然主義作家にさへ劣らぬ、以後明治廿二年頃まで大したものなく、坪內先生の〃小說神髓〃はかなり卓見であつた、樋口一葉の〃たけくらべ〃これはいゝ、やがて尾崎紅葉が佛文學の影響を受け入れ、二葉亭四迷が露文學を飜譯してゐる。しかしそのころ文士の幸田露伴その他は西鶴の眞似をしてゐる、それも單に文章の上だけで、思想的には西鶴の深いものを持たなかつた、紅葉が外國物から影響をうけたといつても、それは單に筋の上だけで別に人生に對する態度を學んだのではない、彼の傑作といはれる色夜叉は單なる通俗小說にすぎないが、まだ殘存してゐることは考へさせる事實だ、文學が後世に殘るためには多くの人に讀まれねばならぬ、千葉龜雄氏は明治文壇で後世に殘る作家として幸田露伴をあげたが、この意味で私は不賛成だ、露伴の〃五重塔〃を讀んで知つてゐる人は此の中の文科の人でも小數にすぎまい、一方紅葉と雖も單に大文章家にすぎない、大小說家に非ず、明治四十二年頃から文學界の革命である自然主義の風潮が侵入してきて、從來の既作家をバタ〳〵と轉落せしめた、かくて近代文學の洗禮が行はれた文壇では、一時ありのまゝに書くことが主張され、田山花袋氏がこの總帥として文壇に號令する時代があつた、この一大敵國は夏目漱石先生の文章であつたら、此のありのまゝの描寫に對してあきたらずして新しい思潮がやがて起つてきた

小說とは何であるか、虚構に外ならない、材料は實人生に得ようともそれを構成するのは作者の手腕ではないか、この思想だつた、と同時に日露戰役後露西亞文學が日本文壇を席捲した時代ともなりストリントベルグ等の影響で「人生とは何ぞや、如何に生くべきか」と深く掘り下げて行く考へ方は、單に物を表面的に描寫する自然主義に反抗し始めた。かくて生れて來たのが武者小路氏らの白樺派の文學である、更に前述の自然主義描寫方法にあきたらずして出てきたのが、私や芥川君らの新技巧派だつた、かくて自然主義文學は衰へた、歐洲文學の思想が、思想的に影響したのが白樺派文學であり、技巧的方面で生れたのが新技巧派である、畢竟するに日本の現代文學は西歐近代文學の影響下にあるのである、今の文壇にはあらゆる思想がなげこまれてゐる、この坩堝から今や新しい文學が生れてもいゝ時である、日本文學で外國模倣にあらざるは心境小說だけである（テーマのない小說、外國人にはこれは解らぬ）

日本語は難しい飜譯は至難だ、もし飜譯さへすることが出來れば、その水準比較においては斷じて西歐諸國に劣りはしない

プロ文學は文學を文學以外に奉仕せんとするのだから、實は純粹文學ではない、思想文學は單にその思想を皆に知らせるに役立つにすぎず、皆が知つてしまへば、その文學は衰微する、これがプロ文學衰退の一因でもあり得よう

前述せし如く白樺派、新技巧派との文學を作り出した外國からの思潮はもうこない、新しい文學にはめぼしいものがない（新感覺派など思想的でない末梢的なものが一時唱へられたのは新思潮がこないから新技巧派をゆり動かすだけのものを作り得ないのだ）

小說と戯曲と映畫について私見をのべれば自由な形式の小說の型は衰滅しないだらうが、映畫の完成と共に戯曲は衰滅の動向にある、俳句や和歌に就いても同樣のことが言へる、生活思想の複雜化とともに……（要領筆記・文責在記者）

陽ざし

乙川規彦

白い秋の小窓に
なよなよと蔓草がよぢ登り
陽ざしがゆれてゐる

桐の葉の一ひらが
ひらひら舞ひ乍ら窓邊に散る
うすいカーテンが風に搖れると
その木の葉もおちて行く

エンヂ色のセーターを着た
指の白いお孃さんが
今にもひよつこり顔を出しさうな

靜かな秋の小窓の
午後の陽ざし——

「京大の歌」レコードになる

かつて學友會が賞をかけて募集した本學の歌は、當時學生だつた金澤一夫氏（現工學部助教授）の作が當選し、橋本國彦氏の作曲でひろく一般にうたはれてゐるが、今回「理學部物理化學研究室の歌」とともに音樂部合唱團によりレコードに吹きこまれた。これは非賣品ではあるが殘部五十枚にかぎり物理化學助手室に申込めば實費七十錢でわけることになつた

京大短歌會詠草

寢足らはぬまなこにさびし波のいろすずろ遠よりて音にも出でぬ　早瀨讓

生垣を越えて吹き來る稲田の風げにおぎろなき光なるかも　吉池浩

湯屋よりの落水こゝまで流れ來て曇り日のひかりに蒸れて臭へる　本田壽首

青桐の一本枯れて兵舍並べり濠の深きを秋は雨ふる（大阪城）　田中順二

霧れにごる空ふかく飛ぶ竹の葉の目にさやかにも光つゝ消ゆ　朝山信彌

細々と遠くも降るか朝時雨から松山に滲み光る見ゆ　松山國義

子の我に苦勞は言はず病む父の手紙は懈怠の心ひたうつ　吉田要

電車のあふりをまともにくつて、ビルディングの一角の上の月に大息をする　村木馨

さらさらと風渡りゐる海原は波のはたてに光殘せり　鯉田榮一

やせ細き山虎杖は實をもちてさら鳴るがにそよ風の搖れ　野田幸男

他國者の嫁を見ばやとときほひ立つ日盛りの郷里も思ひ出されぬ（悼歌）　里井睦郎

我汽船の分け行く波の大いさに魚釣る小舟危く搖る見ゆ　森瀨數一

月の冴え身にさむざむと織るなり賊舍の友の人戀ふもの　中島武之助

童らいに―後のひそけさに十幾頭の三つならびて夕かげる街道　山形安二

雨やみし街道に夜更けの電車待ちて居り窪みの水に月の動きゆくなり

据義の赤くひるがへり白き犬あとより飛べり濡き小溝れ　江藤不二郎

新刊

☆租稅原則學說の構造と生成（井藤半彌著）この書は租稅政策論といふ知識體系の論理構造及びその基本原理たる租稅原則に關する學說研究である、全篇をつらぬく中心思想は強制獲得經濟概念であるこの概念及び政策論一般、その應用としての租稅政策論の構造につき說明し、ついで著者のとる最少社會犧牲說又は最少社會價値說が如何にして生成したかを論述してゐる（嚴松堂・四圓五十錢）

「中庸」の早朝講義

本學職員有志の發起で漢文研究會といふのが出來、さる十七日の日曜から、毎日曜日あさ七時から九時まで、學生集會所で元高野山大學教授久保雅友氏を聘して中庸の講義をきいてゐるが、職員中の希望者は學生課鈴庄氏まで申込まれたしと

時計　メガネ　修繕
學生様並ニ學校關係各位ニハ特ニ一割引御奉仕
御評判ノ
裏門前
イタツ時計店

眼鏡　正確　專門　廉價
京都帝大醫院眼科
府立醫科大學眼科
赤十字京都療院眼科
伏見病院眼科
御指定
獨逸カール、ツアイス會社特約店
吉川眼鏡店
京都大學病院眼科小兒科門前
電上四九一二
振替大阪三八七二八番

體温計類　新藥各種　處方調劑
熊野電停前
東山藥局
電上三一四〇

日本のインキを代表する　丸善アテナインキ
使へば使ふ程書きよくなる　丸善アテナ萬年筆
最寄の文具店でお求め下さい

京都日出新聞

學　窓にありながら活きた社會實生活へ常に正しい認識と批判を持つことの必要さは今更贅言を要すまい、特に最近の如く社會の底流を貫く思潮が奈邊に向ふかを正確に把握するには就中日常社會現象を如實に研究の資に供すべきである。

茲　に吾社が創業六十年來の輝く使命として在來の新聞紙選擇の要件である正確、迅速の條件の他に更に左の條件を數へて最も京都的なる特色を發揮してゐる。

卽ち京都に在住する人にとつて誰でもが讀まなければならぬ編輯方針の下に立つてゐる〃京都では京都日出新聞〃の旗の下に颯爽たる紙面を見給へ、先づ學術、宗教、美術の都に相應しい一切の記事の集錄は諸君を魅惑せずにはおかないであらう。

兄等が學窓生活中京都を知りたいならば本紙を措いて絶對にあるまい。と云つて世界情勢から無關心の態度を持つてゐるわけではない。特に時事解說に對しては他の追隨を許さないものがある。本紙が逐年他紙を壓倒して智識人を悉く讀者層に獲得しつゝある事は何よりもよく此の事實を物語つてゐるものである。

滋賀日出新聞